

第2次南砺市交流観光まちづくりプラン マネジメント会議 議事録

開催日時：令和5年10月13日(金) 9:45~12:30

開催場所：五箇山合掌の里 山下家

出席者 佐藤悦夫委員、此尾治和委員、竹中雅司委員、日野淳一委員、林口砂里委員、
遠藤あずさ委員

(オブザーバー参加) 東田晃 (五箇山合掌の里)

(欠席委員) 徳田琴絵委員

事務局 ブランド戦略部 岩佐部長

交流観光まちづくり課 吉田課長、三浦ブランドプロモーション室長、江川、岩倉、前寺、福島

JTB総合研究所 安藤

ブランド戦略部各課長

資料

1. 開会

(委員長)

今回は、現地での開催ということで、普段と違う場所で行うことで斬新な発想、新たな価値等見出し、実りある議論をしていければと思う。

今回の会議の目的について事務局から説明をお願いしたい。

(市事務局)

今回の会議では、①ワーキング・戦略会議の報告と施策の進捗の共有、②「合掌の里の再生」については、前回、合掌の里についての議論は打ち切り、事務局の方で考えるということになっていたが、再検討の結果、合掌の里の未来予想図について前向きに意見をもらい、策定をし直したいと思う。本日、現場を見た結果やゲストスピーカーとの意見交換を通じて新しい観点での意見もあると思うので、今後の市役所の方向性などについて参考にしたい。

また③として、「10年先を見据えた観光を支える人づくり」については本格的な議論開始の前に「頭出し」的な位置づけとしてアントレプレナー、人材育成の原案について意見を頂戴したい。

2. (報告と確認) まちづくりプラン各会議体及び各施策(推進事項)の進捗状況について

(市事務局)

現在の進捗状況について説明する。評価・検証シートの中にワーキング会議の内容を加筆してある。ワーキング会議内で A グループは「南砺市一宿構想」、B グループは「旅アト消費の促進」を進めている。

A:「南砺市一宿構想」として現在、グーグルマップのエリアとしての活用を進めている。今回は3つ試作を作り、内容の確認・精査を行い、マップの利活用についても考えた。マップを利活用していくために告知手法を具体的に決めていく。QRコードの活用など含めて検討を行う。

B:「旅アト消費の推進」について、前回は1つの例としてあんぼ柿を中心に来訪者にどう告知・PRをするのかを議論した。ワーキング会議に干柿組合の会長である藤井会長に来てもらい議論をした。告知手法の検討を行っていく。次は告知手法の確定に移る。

(全体として)今回からグループごとにリーダーを設置したことで、議論が円滑に活発に進んだと思う。また、現場の方を招いて話を聞くことで、よりよい議論となったので、これからもこういう機会は作っていきたい。一方、課題としてはワーキング会議の予算や伴走者が必要で、物事を決めても実務を担う人がいない状態となっている。また、会議の間が長期間空くため、その間のコミュニケーションを行うために会議の委員の方々との連絡手段を考える必要がある。

来年度以降の予算確保について、現在動いている。

(委員長)

グーグルマップについて、「飲みに行った後の2軒目におススメマップ」の他に何をテーマに作成する予定か。

(市事務局)

「南砺の地酒が買える場所」、「南砺女子がおススメするランチマップ」を作成予定

(委員長)

(旅アト消費のしくみについて)告知手法は既存のネットのECサイト等を利用するのか。

(市事務局)

将来的には直販やECサイトにつながる流れにしていきたいと考えている。内容はストーリー性のあるもの共感性のあるものを検討している。会議内では、オーナー制度などが案としてでていた。クラウドファンディング等の利用を含めて告知を行っていければと思う。

3. (共有と議論)「合掌の里の再生」について

(市事務局)

前回、いったん議論を打ち切ると言っていたが、市役所で再考し、先の姿、未来予想図についてご意見いただきたいということになったため、再度議論をさせていただきたい。

合掌の里の未来予想図について、合掌の里単体での予想図にするのか、それとも五箇山エリアでの予想図にするのかも含めて考えていきたい。令和6年の上期までには中長期の未来予想図の確定をしたいと考えている。令和6年度に指定管理者の選定があるため、合掌の里の方向性をマネジメント会議で検討し、管理者に伝えてその後の管理を進めてもらうような形になると思う。

(委員長)

ここまでで質問はないか。ないようであれば、先にゲストスピーカーの発表をお願いしたい。

(ゲストスピーカー発表)

武蔵野大学 岩崎比奈子氏
外部の目線から「合掌の里の未来予想図」を考える

(A 委員)

本籍地としての五箇山への思いを聞かせていただきたい。

(岩崎氏)

本籍地ではあるが、ふるさとに恩返しできていないという思いが強い。

大雨が降ったら山が大丈夫か、寒いといったら雪は大丈夫だろうか和本籍地に対しての思いはある。それを形にできる仕組み、応援できる仕組みがあるとよいのではと考えている。

その場に出向く必然性や理由があると気持ちのある人、思いのある人は県外から来てくれるのではないかと思う。

(B 委員)

合掌の里についてどのように感じているか教えていただきたい。

(岩崎氏)

合掌の里は小さい頃に家族で利用するなど思い出深いところ。この会議で合掌の里の未来図を考えるというのは期待をしているところ。教育旅行や研修などでの誘客だけがメインではないのではないかと思う。祭事等で使用するというよりは日常的なもので活用していくのがよいのではないかと思う。

(委員長)

引き続き、未来予想図の想定範囲等について説明をお願いします。

(市事務局)

どの範囲で検討していくか考える必要がある。合掌の里単体で考えないといけない部分もあるが、菅沼との連携や五箇山全体で考える、もしくは大きく南砺市全体で原案を考えていきたいと思っているのでご意見をいただければと思う。

(C 委員)

南砺に来る前は五箇山地域という認識だったが、移住してきたら旧町村の意識が強い。まずは、地域づくり協議会の範囲で連携を進めていくのが良いのではないかと思う。

(D 委員)

小規模でやっていき、ゆくゆくは大きな規模で連携していくのが良いと思う。

(E 委員)

地元住民がどれだけ関心をもって協力するかが重要だと思う。

(A 委員)

まずは合掌の里と菅沼を中心に考えていく必要があるのではないか。地域の課題を地域内の住民だけでは解決は難しいため、外の方の協力が必要になってくる。外との関係を考えていく必要がある。

(市事務局)

現状として住民、施設の方で困難なサイクルを打破する熱量や取り組みがない。危機感の共有や大きな将来像を未来図に描いて共有する、どこに戦略性を持つのかというようなことを載せたものが未来図だと思う。

指定管理者と考えた未来予想図がうまく連動してやっていけるのかというところとそうでない気がする。市の手続き的なところもこの議論の中で提言できればと思う。

(市事務局)

今現在の公共施設再編プランの方では合掌造り家屋は残していくという市の考えは変わらない。状況的には厳しいが第三セクター改革プランにおいて指定管理料は減らしていき自立運営をやってほしいという提案はしている。

将来的にどうしていくかという方向性は喫緊の課題。今回の未来予想図の意見をいただきながら、方向性を決めていくということもあると思う。ただ、地域の方の意見ももらいながら進めていく必要がある。

(B 委員)

菅沼には宿泊施設がないので、合掌の里に泊まってもらってしっかりと菅沼を見てもらうというような組み合わせは必要になってくる。世界遺産として PR するときには五箇山全体でということになると思う。ただ、マンパワーが足りていない。

市全体で考えながら個別に連携を考えていく必要があると思う。

(委員長)

最初は小さいところからやっていって最終的には南砺市全体を考えると、最初から南砺市全体の中で考えながら、個々の要素の組み合わせということであれば、結果としては同じようなことだとは思

う。

(市事務局)

出発点をどこからやっていくか決めてそこから全体に波及させていった方が良いと思う。まず地元としてこれからどうしていきたいなどの意見を固めてスタートしないといけないのではないかと考えている。全体でやっ

ていこうとすると目的がぼんやりしたままになり、あまりよくないのかなと思う。

(委員長)

そういうことであれば、まず合掌の里からスタートしていくのがよいのではないかと。個人的には合掌の里はとても良い施設だと思う。なぜ人が来ないのかの原因の究明が必要。利用者にアンケート取るなどしてどこに原因があるのか把握していかないといけない。ターゲットの話もあったが、世代によって感覚が全く違う。1 つの世代だけを対象にするわけではないが、活用の機会はあるのかなと思う。

(市事務局)

資料の図でみると小さく見えるが、（平面的にとらえるのではなく）実際には高低差もあり、幅広い地域の連携になる。

施設として収益性を上げていかないと持続性がない。条例で定められた単価で収益があがっていくのかということも考えないといけない。

昨年、長野県で合掌をコンセプトにしたラグジュアリー向けのリゾートができた。これがとても人気になった。外部の方が上手く利用しビジネスにしたという状況もあるため、地元の方とのコミュニケーションも図りながら経営していけるようにし、地元に戻元していけるようになれば循環につながる。

以前、設備投資を行ったと言っていたがその投資は最低限のことでただハードとしての付加価値というわけではない。

（A委員）

ハード面の付加価値は確かに足りていない。もし、ラグジュアリー向けにするのであれば多くの投資が必要になる。それは、民間の力を借りないとできない。ただ、何を住民が望んでいるか、地域の方に寄り添わないと意味がない。ソフト面でいうと地元の文化とかの体験は付加価値になる。そういった体験は顧客が満足するだけでなく、住民の意識変化にもつながる。外の方とかかわりを持つと住民の意識は変わっていくと思う。

（E委員）

地元のことをしてくれる伴走者が地元において協力・活動をしてくれる必要がある。

（C委員）

個人的なイメージとしては外の人を引っ張ってくるのはそこまで難しくはないと思う。地域住民と関わることで喜ばれる方は多い。

（D委員）

泊まるための箱としての機能だけでなく、人が集まるような施設・空間になっていく必要があるのかなと思う。

空間として滞在したいという思いにつながるようなものになればと思う。

（B委員）

菅沼と合掌の里がどうつながっていくかが大事。合掌の里を残していくためには菅沼との連携が必須だと思う。地域の方の取組等がどう活かせるかが大事になってくる。施設維持のためには稼いでいかないといけない。ただ、来てもらえる可能性はあるのかもしれないがマンパワーが足りないためどう力をつけて稼いでいってもらうかが大事だと思う。

（委員長）

ハードウェアを活用し、ソフト面を中心に活性化を図る必要がある。

もし、ラグジュアリー向けにやっていくのであれば、民間の資金を入れる必要がある。

4. （共有と議論）「10年先を見据えた」観光を支える人づくりについて

(市事務局)

人材育成や人づくりに踏み込んだものは他にはあまりない先行的な取り組みとなっている。

アントレプレナーは特殊な力ではなく、これから生きるために必要な力ということでメンバーの皆様には認識を統一して今後議論をお願いしたい。

(市事務局)

観光分野でも将来世代への投資をしていかないといけない担い手がなくなる。

地元での就業イメージの形成や地元で商業を起こすことは自分にとっても地元にとっても、よい影響があるということを地元にいる間に教育を施していくのが大事。

(B委員)

14歳の挑戦をやったが生徒の皆が地元を知ってもらって好きになってもらうきっかけになる。

市で全庁的に組み合わせさせてやってもらった方が良いのではないかと思う。総合的に話し合いやっていてもらいたい。

5. 閉会

以上